『キャナリー・ロウ』——「道」の世界を探る

上　優二

（はじめに）

ジョン・スタインベック（John Steinbeck）は、第二次世界大戦のさなか、1943年6月にニューヨーク『ヘラルド・トリビューン』紙の特派員としてヨーロッパ戦域を約5ヶ月間取材し、1943年10月にニューヨークに帰還した。この戦争体験は辛く惨めなもので、肉体的にも、精神的にも彼に大きな打撃を与えたようだ。彼は1944年4月12日付のカールトン・A・シェフィールド（Carlton A. Sheffield）に宛てた手紙のなかで、その頃の自分の健康状態についてつぎのように述べている。

> Having some strange symptoms which continued, I went to a doctor last week and found that both ear drums had been burst and that there are probably little vesicles burst all over my body, in the head and under the skin and in the stomach. . . . I can hear quite well now so the drums are healing or are healed but the others, the nervousness, dreams, sleeplessness etc. have to take their own time. (268)

実際に鼓膜が破裂し、後に手術もせずに音が聞こえるようになったことに対していささかの疑念が残るものの、この頃スタインベックは先の戦争体験によるトラウマ（精神的外傷）に苦しんでいたようである。そうしたさなか、彼は同年7月4日のウェブスター・F・ストリート（Webster F. Street）に宛てた手紙で明らかなように、戦争とは無関係なユーモアに富んだ小説を書くことを目指した

(270)。そして、彼は同年9月27日にシェフィールドに宛てた手紙のなかで、その小説が完成し、『キャナリー・ロウ』(*Cannery Row*, 1945) という書名にしたこと、またこの小説には4つのレベルがあること、そしてあらためて、この小説が第二次世界大戦にひとつも言及していないと述べている (273)。

物語は彼が師とも仰いだエドワード・F・リケッツ (Edward F. Ricketts) をモデルにしたドック (Doc)、いわゆるスタインベック・ヒーローを中軸にすえ、マックとその仲間 (Mack and his friends)、食料雑貨店の店主である中国人リー・チョン (Lee Chong)、そして売春宿の女将であるドーラ・フラッド (Dora Flood) とそこで働く人々、その他自殺する人々を含め、数多くの人間群、また生物群が登場し、この物語世界を形成している。語り手は全知的な立場に立ち、さまざまなエピソードを語り、生と死とが混在する玄妙で悠久なる世界を現出する。この世界にはユング心理学 (Jungian psychology) や非目的論的思考 (Non-teleological thinking) とともに、ピーター・リスカ (Peter Lisca) が *John Steinbeck: Nature and Myth* (1978) のなかで指摘しているように(110-123)、道教 (Taoism) の世界観が色濃く映し出されている。スタインベックとドックのモデルとなったリケッツとが完全に同じ世界観を共有していたわけではないだろうが、二人は共著として、『コルテスの海』(*Sea of Cortez*, 1941) を出版し、そのなかでともに非目的論的思考などを展開しているので、二人がかなり近似した世界観を抱いていたことはよく知られている。本論では道教的視点に焦点を絞り、この作品に描かれている世界観を考察していく。因みに、リチャード・アストロ (Richard Astro) は*John Steinbeck and Edward F. Ricketts: The Shaping of a Novelist* (1973) のなかで、スタインベックがリケッツとともにカリフォルニア湾で展開した哲学的前提を『キャナリー・ロウ』に直接的に応用しているので、この作品がいろんな意味で『コルテスの海航海日誌』(*The Log from the Sea of Cortez*, 1951) の小説としての続編である (159-60) と指摘している。なお、本論が前述した4つのレベルのうち、どのようなレベルにまで到達しているのか筆者には判断できないが、この作品が単なるユーモア小説ではないことは確かである。けだし、「蟹は甲羅に似せて穴を掘る」と言われているよ

うに、読み手もまた語り手の語る物語世界に自分の姿を投影し、自分の物語世界を再構築していくしかない。

(一)

スタインベックは『創作日記「エデンの東」ノート』(*Journal of a Novel: The East of Eden Letters*, 1969) のなかで、プラトン (Plato)、釈迦 (Buddha)、イエス (Jesus) 等とともに、老子 (Tao-Tze) を偉人の一人としてその名をあげている (115)。老子という人物については諸説あり、明らかではないが、彼は中国の戦国時代に戦乱の世を避けて村落に住み、間断のない闘争と殺戮を回避する原理として「無為自然」、「少欲知足」を説き、『老子』の形成に深く関わった人物であると言われている。福永光司の『老子』によると、老子の哲学の根本は『有限の存在である人間が、悠久無限な実在であるこの“道”に根源的な目覚めをもち、その形なき形をじっと見すえ、その声なき声にじっと耳をすますとき、己れが本来どのような存在であり、何を為してゆけばいいのか、人間が本当の意味で生きるということは、いったいどのようなことであるのかが明らかになると教える』(4) ことであるという。そして、老子はその「道」がいかなる実在なのかさまざまな言葉で説明するが、人間の言葉では説明できないという立場に立つ。しかし、老子はその「道」を『あるいは詩的表現で、あるいは象徴的・比喩的な言葉で、もしくは逆説的・否定的な言い方でさまざまに説明する』(福永 4)。たとえば「形なき形、声なき声」、「根源的に一つであるもの」、「あるがままのもの」、「万物を生み出すこの世界の母」(福永 4) といった表現などがこれにあたる。興味深いことに、こうした道教の世界は、『キャナリー・ロウ』の物語世界、つまりパラドックスやメタファーや象徴性に満ちた混沌した世界と底通している。たとえば、語り手はこの物語世界の冒頭部分において以下のように語っている。

> The word is a symbol and a delight which sucks up men and scenes, trees, plants, factories, and Pekinese. Then the Thing becomes the Word and back to Thing again, but warped and woven into a fantastic pattern.

The Word sucks up Cannery Row, digests it and spews it out, and the Row has taken the shimmer of the green world and the sky-reflecting seas. (14)

冒頭に「言葉は象徴である」とあるが、語り手は言葉によってこの作品の物語世界を創造し、そのなかに人間、動植物、そして景色などあらゆるものを取り込んで、そして数多くの象徴を織り込んでいく。言葉は象徴であり、象徴は言葉によって創出されるのである。そして、「キャナリー・ロウ」はあらゆるものを包含する小・中世界の象徴となり、大世界の象徴となる海の微光をおびてくる。その物語世界は混沌とし、パラドックスやメタファーに満ち幻想的な模様を織りなして、道教の世界に近似してくる。

老子は「人間的な有為のなかで作られた世俗的な価値観を顚倒させる。彼は世俗の人々が絶対とみるものを相対とみ、上徳とするものを下徳とみ、善とするものを不善とみる。世俗の人々は富と貴とを無上の価値とし、人知人欲の限りを尽くしてそれを争い求めるが、彼は争わないことを『上善』（至高の価値）とするから『足るを知る』ことを富とし、『辱を守る』ことを貴とする」（福永 16）という立場に立っている。こうした生き方は、『キャナリー・ロウ』のなかでは、マックとその仲間たちをはじめとするその住民たちの生き方と二重写しとなる。まず語り手は作品の冒頭で世俗的な価値観を顚倒させて、「キャナリー・ロウ」の住民たちについて、次のようにのべている。

Its inhabitants are, as the man once said, "whores, pimps, gamblers, and sons of bitches," by which he meant Everybody. Had the man looked through another peephole he might have said, "Saints and angels and martyrs and holy men," and he would have meant the same thing. (1)

このように、語り手は、社会の片隅に置かれて軽蔑されがちな人々が別の視点から見れば、実は尊敬すべき人々であるかもしれないとし、世俗的な価値観を顚倒

してみせる。語り手は道教と同じように世俗的な価値観を顛倒させるために、しばしばパラドクシカルな表現を用いながらパラドクシカルな物語世界を語っているのである。興味深いことに、こうした道教的世界観は、ある事象を一義的に定義することを拒否するというポストモダニズムの視点と通底する結果となっている。

語り手は第二章においても、社会的成功や物質欲に捕らわれた人々がマックやその仲間たちを "no-goods, come-to-bad-ends, blots-on-the-town, thieves, rascals, bums" (15) と呼んでいるが、実は彼らこそ "the Beauties, the Virtues, Graces" (15) と賞賛してみせる。というのも、彼らが基本的には社会的成功や物質的欲望から解放され、道教の説く「少欲知足」、「無為自然」の教えにかなった生き方をしているからである。そして、語り手は「自然にましますわれらの父」(Our Father who art in nature) がマックとその仲間たちに圧倒的な愛を抱いているに違いないと断言している (15)。その上で、語り手は社会的成功や物質的欲望に捕らわれた人々に対しては、"What can it profit a man to gain the whole world and to come to his property with a gastric ulcer, a blown prostate, and bifocals?" (15) と警告をする。因みに、この警告は『老子』のつぎの警告と軌を一にしていることは偶然の一致だとは思えない。

名與身孰親。身與貨孰多。得與亡孰病。
是故甚愛必大費。多藏必厚亡。
〈書下し文〉
名と身と孰れか親しき、身と貨と孰れか多れる、得と亡と孰れか病いある。是の故に甚だ愛すれば必ず大いに費え、多く蔵すれば必ず厚く亡う。(福永 298)

ドックもまたマックとその仲間を「本物の哲学者」であると強調したのち、彼らの「少欲知足」の生き方について、

"I think they survive in this particular world better than other people. In

a time when people tear themselves to pieces with ambition and nervousness and covetousness, they are relaxed. All of our so-called successful men are sick men, with bad stomachs, and bad souls, but Mack and the boys are healthy and curiously clean." (149)

と述べている。すなわち、マックとその仲間たちは、世間の人々が野心や欲望で健康をそこね魂を汚しているなかで、道教の説く「無為自然」、「少欲知足」の教えに則った生活を営み、それゆえに魂も汚れることはないのである。また、欲望に捕らわれて身を引き裂くこともないので、一見すると生存競争の舞台となる社会にあって敗残者に見えるが、実は争いを回避し満ち足りた生活を送るゆえに、他の人々よりも生存する能力が高いというパラドクシカルな物語世界が浮かび上がってくる。ただし、マックたちは、完全に欲望から解放され、社会的価値をすべて否定するような生活を送っているわけではない。たとえば、ドックのために開くというパーティも実は自分たちが酒を飲んで楽しみたいという欲求も少なからず見られる。しかし、道教もすべての欲望を否定するものではなく、あくまでも「少欲知足」の生活を理想とする。繰り返すことになるが、マックとその仲間たちは、基本的には「無為自然」、「少欲知足」という道教の教えに則った生活を送っているのである。スタインベックは先の戦争体験を通し、肥大化した欲望や野心の行き着く先が戦争であるという老子の思想に惹かれ、ゆえにマックとその仲間たちの「無為自然」、「少欲知足」の暮らしぶりに強い共感を抱き、この物語世界を構築していったにちがいない。

(二)

リー・チョンは食料雑貨店を経営し利潤を追求しなければならないので、マックとその仲間たちと同じように「無為自然」の生活をしているわけではない。しかし、その生活は簡素で欲望に捕らわれたものではない。すなわち、彼は老子の教えと利潤の追求とのバランスをうまく保ちながら暮らしているのである。語り手はそのリー・チョンの暮らしぶりを以下のように語っている。

Lee Chong is more than a Chinese grocer. He must be. Perhaps he is evil balanced and held suspended by good—an Asiatic planet held to its orbit by the pull of Lao Tze and held away from Lao Tze by the centrifugality of abacus and cash register—Lee Chong suspended, spinning, whirling among groceries and ghosts. (14)

リー・チョンは暴利を貪ることはないが、彼からモントレー随一の借金をしていたホレス・アベヴィル（Horace Abbeville）を結果的に自殺に追いやることになる。しかし、リー・チョンはアベヴィルの葬式を引き受け、残された家族に食料品を届けたりしている。ロバート・S・ヒュージ・ジュニア（Robert S. Hughes, Jr.）はその論文 "'Some Philosophers in the Sun': Steinbeck's *Cannery Row*" のなかで、そんなリー・チョンの生き方をを以下のように的確に指摘している。

Grocer Lee Chong, having inherited the wisdom of China and the pragmatism of America, puts people before profits and still manages to balance his accounts. (120)

リー・チョンは、確かに道教の教えと利潤の追求とのバランスをうまくとってはいるが、生きていくために利潤を追求することで、他人を自殺に追いやってしまうという現実からは逃れることはできない。こうした現実は何もリー・チョンに限られたものではない。語り手は、そうした現実の世界を「大きな潮溜まり」(the Great Tide Pool）のなかに見出し、すべての生き物が生と死、善と悪とが混在する玄妙で悠久なる世界のなかで生きていることを示唆している。そして語り手はドックを通してその「潮溜まり」という小世界から「キャナリー・ロウ」という中世界へ、果ては時空を超えた大宇宙までを展望する。まずは、「潮溜まり」が生存競争によってくりひろげられる生と死と再生のおりなす世界であることを確認したい。

The smells of life and richness, of death and digestion, of decay and birth, burden the air. (32)

マイクル・J・メイヤー（Michael J. Meyer）はその論文 "Steinbeck's *Cannery Row*"（1993）のなかで、"The pool reflects the interrelation of opposites, especially the opposites of life and death."（57）と述べたうえで、「潮溜まり」の様相を次のように述べている。

The pool also demonstrates parasitic as well as commensal relationships, mirroring the fact that humans occasionally prey on other humans and at other times long to live in mutual benevolence, understanding, and acceptance. (57)

「潮溜まり」は、人間を含めて生物全体が置かれている環境、あるいは生態学的様相を読者に提示している。その物語世界は生存競争、寄生、共生、再生の混沌した様相を示している。そして、ドックは、その混沌とした物語世界をあるがままに受け入れ、その「潮溜まり」の生命現象を通して、そこから宇宙の果てへと向かう全体論（wholism）へと飛翔していく。とりわけ、ドックが「潮溜まり」で自殺したものと思われる美少女の死体に遭遇し、「ブレイキング・スルー」（breaking-through）を経験する場面はきわめて印象的である。ルイス・オウエンズ（Louis Owens）は、*John Steinbeck's Re-Vision of America*（1985）のなかで、ドックが美少女の死を媒介にブレイキング・スルーを経験していることを明確に読み取り以下のように指摘している。

With the appearance of the drowned girl, more "refuse of the sea," the tide-pool metaphor suddenly opens outward to engulf all reality, and Doc experiences his vision of the "whole"—he "breaks through." (187)

ドックはこの経験で、『コルテスの海航海日誌』にみられる「万物がひとつにつながっているという深遠な感情」(217) を抱いたものと思われる。スタインベックとリケッツは『コルテスの海航海日誌』のなかで、こうした深遠な感情はイエス (a Jesus)、聖アウグスティヌス (a St. Augustine)、聖フランチェスコ (a St. Francis)、ロジャー・ベーコン (a Roger Bacon)、チャールズ・ダーウィン (a Charles Darwin)、そしてアインシュタイン (an Einstein) のような人々が共有したものである (217) と述べている。この「万物がひとつのものにつながっている」という思想は道教の以下のような世界観と通底している。すなわち、道教では「道すなわち真実性の世界においては万物は根源的に一つであり、平等である」(福永 13) と説くのである。

さて、ドックの研究所は「潮溜まり」の小世界よろしく、ありとあらゆるものが混沌と混在している様相を呈している。まず、研究所では、海綿、イソギンチャク、ヒトデ、二枚貝、フジツボ、昆虫、カタツムリ、クモ、ガラガラヘビ、ネズミ等々数おおくの美しい生き物が売られている。さらに、学習用のサメの標本もあれば、小さな人間の胎児まである。それからさまざまな研究所の装置や道具にくわえ、あらゆる種類の書物、辞書類、百科事典、詩、戯曲などもある。そして、大きな蓄音機に何百枚というレコードがあり、さまざまな絵画の複製が壁に貼られている。そして、語り手は、"He [Doc] became the fountain of philosophy and science and art." (28) と述べ、あるいは "He lived in a world of wonders, of excitement." (29) と語り、ドックをまさに「キャナリー・ロウ」という世界の中心的な存在として描いている。

奇妙なことに、そうしたドックにもひとつだけ恐れることがあるという。語り手はドックが、「潮溜まり」では海水のなかに胸まで浸かっても平気だけれども、頭の上に雨が一滴でも落ちるとパニック状態になると述べている (28)。語り手はこうした表現でどのようなイメージを読者に伝えようとしているのだろうか。不可解と言えば不可解である。しかし筆者は、この雨の滴りはキリスト教の洗礼をイメージしたものであると推察する。すなわち、ドックは一つの考えに固執することを拒否する道教的世界に住みついているので、一つの宗教、宗派、すなわ

ち固定された考え方に囚われることを拒否しているものと考えられる。実際、語り手はドックの住みつく世界にさまざまな宗教的要素、哲学的要素を織り込んでいる。すなわち、ドックはある時はキリスト教のグレゴリオ音楽の世界を愛し、ある時はサンスクリッドの抒情詩「黒いマリゴールド」の世界に憧れ、そしてエジプトの「死者の書」を座右の書として、そして道教の詩人と言われている李白の世界に傾倒する。また、ドックが「自然にまします神」という表現を用いていることは「自然神」の要素もこの物語世界に包含されてくる。そして何よりも「潮溜まり」のなかで美しい少女の死を媒介に、「全体」へと「ブレイキング・スルー」していく先のドックの経験がきわめて重要である。ここでユング心理学の視点に立てば、ドックは人類が共有する「集合的無意識」へと分け入り、人類が太古の昔より信仰したさまざまな神々を包含した「全体」と出会っていると言ってもよいだろう。そして、その「全体」とは前述したように、道教の「道」の世界と合い通じる世界である。

(三)

『キャナリー・ロウ』には、さまざまなエピソードがパッチワークのように織り込まれていて、それが混沌とした「潮溜まり」の様相と重なりあっている。そうしたエピソードのひとつに不思議な老中国人が登場してくる（因みに、老子という名前は中国名の老いた男という意味である)。ある人はその老中国人を神と考え、また年寄りたちは彼のことを死と考えたという。そして、彼のまわりにはいつも雲のような恐怖が漂っていたと語り手は述べている。ある日、アンディ(Andy)少年が勇気を奮い起こしこの老中国人をからかってはやしたてたところ、老中国人が立ち止まりふり返ったという。そして、そのくぼんだ茶色の目がアンディ少年を見つめたところ、その目は大きく広がり、老中国人の姿は消えて、透明に光る茶色の目になったというのである。そしてアンディ少年がその透明に光る茶色のドアをのぞくと、そのなかに寂しい田舎の景色が見えてきたのだ。その平坦な景色は何キロもつづき、その果てに牛の頭や犬の頭や天幕やキノコのような形をした奇妙な山脈がそびえていたという。そして、アンディ少年が泣き出す

場面が次のように語られている。

> And the loneliness—the desolate cold aloneness of the landscape made Andy whimper because there wasn't anybody at all in the world and he was left. (24)

アンディ少年が老中国人の目のなかに見た、この荒涼とした景色は、いったい何を物語っているのだろうか？　あまりに唐突で読者によっては幾分戸惑いを覚えてしまうかもしれない。筆者は、オウオウエンズの "The 'desolate cold aloneness' in the Chinaman's eyes is a projection of the boy's own unconscious awareness of death and of the inexorable aloneness represented by the idea of death." (181) という解釈を支持したい。と同時に、筆者はこの荒涼した風景が道教の説く以下のような「道」の世界をも暗示しているものと推察する。

致虚極。守静篤。萬物竝作。吾以觀復。夫物芸芸。各歸其根。歸根曰静。是謂復命。復命曰常。知常曰明。

〈書下し文〉

虚を致すこと極まり、静を守ること篤く、万物並び作れども、吾れ以て復るを観る。夫れ物は芸芸たるも、各おの其の根に帰る。根に帰るを静と曰い、是れを命に復ると謂う。命に復るを常と曰い、常を知るを明と曰う。(福永 128)

このように「道」の世界においては、万物は「道」の働きによって生み出され、この眼前の世界に生動するが、草木が根から生まれて根に帰るように、すべて「道」の根源的な静寂のなかに帰っていく。そして「無為自然」の道を体得した聖人は、こうした世界にあっては生と死の区別はなく、死は恐れるものではないという絶対の智恵に目覚めているという。静寂なる死の世界に帰ることは永遠不滅の世界に立ち入ることであると理解し、安らかにその世界を垣間見ることができるからだろう。しかし、アンディ少年はその境地には至っておらず、やはり死

の孤独な世界を垣間見ることで恐怖を覚え泣き出してしまうことになる。おそらく、「ブレイキング・スルー」を経験したドックならば、その「道」の世界から目をそむけることはないだろう。

さて、ジャクソン・J・ベンソンは、*Steinbeck's Cannery Row: A Reconsideration*（1991）のなかで、ドックがグレゴリオ音楽を聞きサンスクリットの抒情詩「黒いマリゴールド」を音読している時に「潮溜まり」での「ブレイキング・スルー」を再び経験していることを指摘している（20）。興味深いことに、その「黒いマリゴールド」を精読していくと、次の一節にドックの「潮溜まり」での「ブレイキング・スルー」の体験の内容が暗示されていることがうかがわれる。

> Just for a small and a forgotten time / I have had full in my eyes from off my girl / The whitest pouring of eternal light— (208)

ドックはこのように美少女の死、あるいは音楽や詩といった芸術を通して、「永遠なる光の純白な流出」を見出し、根源的世界あるいは道教的な世界にいざなわれているのである。

さて、この物語は、ガラガラヘビが虚空を凝視するという奇妙な場面でその幕をおろすことになる。これも不可解と言えば不可解である。語り手は、なにゆえに最終場面にこのガラガラヘビを登場させることにしたのだろうか？　ロイ・シモンズ（Roy Simmonds）は*John Steinbeck: The War Years, 1939-1945*（1996）のなかで、". . . . the gopher, the rats, and the rattlesnake, can be seen as symbols for human loneliness, . . ."（233）と述べガラガラヘビが人間の孤独のシンボルであると捉えているが、筆者はこれに加えて、もう一つのシンボルを読み取りたい。

『イメージ・シンボル事典』によると、snakeはserpentと大きさの違いはあるものの文献上ほぼ同じものとして扱われてきたという。そしてヘビがすべての原

初の力を表すので、他の古代の基本的なシンボルと同様に、曖昧性をもつという(562)。また、ヘビは「邪悪な性格」のシンボルとなる（564）一方で、「悠久、豊饒、再生」のシンボルとも見なされる（563）という。語り手は自分の物語世界で自殺する人々をはじめ、数多くの死を語ってきたが、このガラガラヘビを最終場面に登場させることで、この世界の邪悪な特質とともに「悠久、豊饒、そして再生」のイメージを読者に強く印象づけることを目指したものと推察される。まさに「潮溜まり」が象徴する物語世界である。

ドックはさまざまな死を凝視し、あるいは混沌した世界をあるがままに捉え、野望や欲望に囚われることもなく、また孤独な生活を送りながら、音楽や詩や絵画などの芸術の世界に生の拠り所を見出して生きているのである。そして、利他の精神に立ち、自分のできる範囲で精一杯、「キャナリー・ロウ」の人々のために尽くしている。ドックは『怒りのぶどう』（*The Grapes of Wrath*, 1939）のジム・ケイシー（Jim Casy）のようにドラスティックな生を生きることはないが、利他的な生き方をするという点ではケイシーとつながっている。ケイシーが動のスタインベック・ヒローだとすれば、ドックは静のスタインベック・ヒーローであると言うことができるだろう。

(結びにかえて)

老子が描く理想社会は原始社会に近い部落共同体で、知識や技術にあまり価値を見出さず、文明の利器をうとみ、外部の社会と隔離された、いわば「桃源郷」ような世界であるという。人々はそこで「無為自然」、「少欲知足」の生活をおくることを旨とする。欲望は知識や技術の蓄積を促し、文明を発達させるが、お互いの利害のために争いを生み出すことになる。知識や技術は確かに文明の利器を生み出すことで、人間の労働を減らし、その生活を安楽にするけれども、その反面、武器つまり争う相手を殺す道具をも生み出すことになる。老子が最も恐れたことは、人間が欲望にとらわれ、対立と闘争にあけくれ安らかな生活を失ってしまうことである。リスカはこうした道教の特質を的確に捉え、“Taoism rejects the desire for material goods, fame, power, and even the holding of fixed or

strong opinions—all of which lead to violence." (118) と述べている。こうした道教の特質は、まさにドックが理想とする生き様、人生観、そして世界観と符合しているのである。

スタインベックは第二次世界大戦の戦争体験を通し、肥大化した欲望や野心の行き着く先が戦争であるとする、こうした老子の思想に強い共感を覚えたにちがいない。また先の戦争体験で、いかなる戦争においても、勝者も敗者もともに傷つき、真の勝者などは存在しないということを痛感したのではないだろうか。そして、善のなかにも悪の要素がかならず存在し、これが正義の戦争と一義的に断言することを拒否する道教的な立場、あるいはポストモダニズムの立場もこの作品には色濃く反映されている。

けだし、彼は戦争と無関係な作品を目指して『キャナリー・ロウ』の創作にあたっているが、意識化されずとも「少欲知足」、「無為自然」という老子の思想に悲惨な戦争を回避するための一つの道を求めたのではないだろうか。

引証文献

〈洋書〉

Astro, Richard. *John Steinbeck and Edward F. Ricketts: The Shaping of a Novelist.* Minneapolis: U of Minnesota P, 1973.

Benson, Jackson J, ed. *The Short Novels of John Steinbeck: Critical Essays with a Checklist to Steinbeck Criticism.* Durham: Duke UP, 1990.

— "Steinbeck's *Cannery Row*: A Reconsideration." Steinbeck Essay Series No.4. 1-29.

Hayashi, Tetsumaro, ed. *A New Study Guide to Steinbeck's Major Works, With Critical Explications.* Metuchen, NJ: Scarecrow Press, 1993.

— ,ed. *Steinbeck's Cannery Row: A Reconsideration.* Steinbeck Essay Series No.4. Muncie, IN: Steinbeck Research Institute, Ball State U, 1991.

Hughes, Robert S., Jr. "'Some Philosophers in the Sun' : Steinbeck's *Cannery Row.*" Benson, *Short Novels* 119-31.

Lisca, Peter. *John Steinbeck: Nature and Myth.* New York: Thomas Y. Crowell Company, 1978.

Meyer, Michael J. "Steinbeck's *Cannery Row.*" Hayashi, *New Study Guide* 34-65.
Owens, Louis. *John Steinbeck's Re-Vision of America.* Athens, GA: U of Georgia P, 1985.
Simmonds, Roy. *Steinbeck: The War Years, 1939-1945.* Lewisburg: Bucknell UP, 1996.
Steinbeck, John. *Cannery Row.* New York: Viking Press, 1945.
—. *Journal of a Novel: The East of Eden Letters.* New York: Viking Press, 1969.
—. *The Log from the Sea of Cortez.* New York: Viking Press, 1951.
—. *Steinbeck: A Life in Letters.* Eds. Elaine Steinbeck and Robert Wallsten. New York: Viking Press, 1975.

〈和書〉
福永光司『老子』東京、朝日新聞社、1997.
アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』東京、山下圭一郎主幹、荒このみ他共訳大修館書店、1984.〔Ad de Vries. *Dictionary of Symbols and Imagery.* North-Holland Publishing Company. 1974.〕